

23 済生学舎から日本医科大学への懸橋 となつた第三代学長 塩田廣重

岩崎 一・殿崎正明・唐澤信安

日本医科大学

はじめに

「日本医大と済生学舎そのものとは関係なきものである。」(日本医科大学自治会報第八卷第九号)という意外な記事を見て本学の校史に詳しい唐沢信安先生にその原因をお尋ねしたところ貴重な資料と助言を頂いたのでこれを元に標題の考察を試みた。

〔I〕何故塩田廣重が懸橋なのか

塩田廣重は第三代学長として三十二年在职したが済生学舎、同窓医学講習会、日本医学校、日本医専、日本医大全てに係わつた貴重な経験を持つ人物である。懸橋となつた塩田の生涯を今一度見直すことにした。済生学舎に塩田が登場するのは明治三十四年帝大卒業後僅か二年目外科学担任講師としてである。以来学校を

離れたのは明治四十年二月から同四十二年迄の海外留学と大正三年十一月から同五年九月迄の日赤救護班長として渡仏した時丈である。又明治三十六年八月三十一日済生学舎の廃校宣言で路頭に迷つた学生の有志達
は九月一日には檄を飛ばし、四日には前後策を協議し、十日後には「同窓医学講習会」を設立し授業を再開した。その際旧講師に救済を依頼した時、塩田は即時に承諾した一人である。(医事新聞六四五号) 在学証明書保持者のみ入学させ、六百余の学生中三百名が申し込み従来通りの授業を再開している。(これを廃校と言つて良いだろうか。) 又明治三十七年四月には「日本医学校」を設立した。経営陣には山根正次校長以下桂 秀馬、山田良叔、丸茂文良、塩田廣重も理事として名を連ねている。(後年創立者問題を起す磯部檢三は幹事である。)(明治三十七年七月私立日本医学校要覽) 明治四十五年七月には専門学校の認可を得たものの学校騒動が続ぎ、大正七年四月中原徳太郎を校長に据え、中原、小此木信六郎、塩田らによる体制を整えた。大正十五年二月に大学昇格を果したものの中原、小此木の

二学長を相次いで失った。後任として塩田が東大教授のまま昭和三年三月第三代学長を兼任した。塩田は優れた手腕を発揮して飯田橋第一病院の改築・予科校舎完成・新進教授の抜擢による授業内容の充実・学位論文審査権取得等々に実績をあげた。併し中原の莫大な借金の返済（日本医事新報七一九号）、創立者問題にからむ意外な騒動（日本医事新報七一九号）（日本医科大学同窓会報二四六号）に巻き込まれる。磯部檢三と塩田の闘争について既に当時の事情を知る者は無く塩田一人で対決し敗れた。更には施設の八割五分を失った戦災、昭和二十一年の学長排斥問題など塩田を容赦なく苦しめた。昭和三十五年塩田学長は遂に退任した。敢て懸橋と言うのは三代にわたる在任期間のみならず逐に生涯奉仕を貫いたからである。済生学舎廃校時に示した義侠心・中原の遺志について学校を發展させたが数十万円の借金を個人で引受け、手術の報酬迄全て注ぎ込んでいた事・その死後全財産迄競売に付された事等を知る人は少い。

〔Ⅱ〕塩田のひとりとなり

力行の人。所謂頑張屋。性急で短気。雷親爺。塩田向う鉢巻などと言われ乍ら明朗闊達機知に富む洒落。剽軽な逸話も多く当代一流の医学者。名外科医として有名だった。

おわりに

塩田廣重は請われて第三代学長として名実ともに大々らしい大学にした。済生学舎と日本医科大学の懸橋になって最後迄勤めた。冒頭の記事杯は塩田を冒瀆するの甚しい誤記である。

昭和四十年五月十一日享年九十二歳をもって他界したが剛毅な塩田はその自叙伝「メスと鋏」（昭和三十八年桃源社）の中でただ「他人はおろか家族の者にも言えぬ苦悩や哀歎が数限りなかった。」と記している。